『李氏說書』考

——林兆恩『四書正義纂』との比較——

佐藤錬太郎

はじめに

『李氏說書』は、明末に流行した四書解釋書の一種である。『李氏說書』九卷（九州大學文學部所藏）について、楠本正繼博士は僞書である可能性を認めつつも、王學左派の思想家、李贄（一五二七～一六〇二、號は卓吾）の著作として紹介している。[1] 繼いで、岡田武彥博士は、僞書說の根據となる疑問點を四つ擧げ、後學の研究をまつとした。[2] 岡田博士が擧げた疑問點とは、

㈠ 李士龍と思われる如眞道人の序文が李贄に言及していないこと

㈡ 李贄編輯、林兆恩閱著となっていること

㈢ 『說書』には、『林氏全書』の『四書正義纂』と同じ章がかなりあり、かつ、李贄の他の著書と重複したところがあること

㈣ 『說書』には、『傳習錄』卷中「答顧東橋書」からの剽竊があり、王守仁の致良知說を受用して三敎歸儒の論に改變していること

の四つである。右の疑問點は、いずれも、僞書說の有力な根據と考えられるが、岡田博士は、『四書正義纂』には『說書』にないものがあり、『說書』にも『四書正義纂』にないものがあることなどから、僞書の確證にならないとし、現存の『說書』が僞書で、林兆恩（一五一七～一五九八）の說が多く收錄されているとしても、李贄と林兆恩の兩者は、三敎歸儒の立場をとる點で論旨に異同がないので、李贄の思想を述べたものと見なして大過ないという見解を示している。爾來、現存する『說書』には、僞書の疑いがあるけれども李贄の思想と齟齬しない內容であるという見解が有力となり、『說書』は李贄の四書解釋書としてしばしば論及されて來た。

しかし、『說書』の文體は、平明で反復表現が多く、李贄の主著『焚書』の文體が冗長で屈折した逆說的表現が多いのとは對照的である。また、『說書』には、六卷本があり、林兆恩『四書標摘正義』正續各六卷に基づく改作であるという書誌的報告もある。[3] 從って、僞書か否か改めて檢證を要すると言わねばならない。

ここに、『說書』と『四書正義纂』及び『四書標摘正義』の關係を明らかにする必要が生じる。また、李贄の思想と林兆恩の思想を同一視してよいのか、『說書』が僞書であるとしたら、僞作者は誰なのか、どのような立場から僞作したのか、という問題についても考察を要することとなる。

本稿は、『李氏說書』九卷（九州大學文學部所藏本）と『四書標摘正義』正續各六卷（內閣文庫所藏四十卷本『林子全集』所收本）及び『四書

正義纂』六卷（學習院所藏『林子全書』所收本）を底本として、その內容を比較檢討しつつ、各本の關係と成立事情を探り、併せて李贄と林兆恩の兩者の思想上の異同について檢討を加えるものである。(4)

一　『李氏說書』の成立時期

現存する『說書』の眞僞を檢討するには、まず、類似性が指摘されている『四書標摘正義』と『四書正義纂』との時間的前後關係を明らかにしておく必要がある。そこで、便宜上、まず、『四書標摘正義』及び『四書正義纂』の成立時期について檢討してから、『說書』の刊行時期について考えることとしたい。

(1)　『四書標摘正義』及び『四書正義纂』の成立時期

『四書標摘正義』及び『四書正義纂』の著者、林兆恩は、明末の宗教思想家で、福建省莆田の名家に生まれている。儒佛道三教の合一を宗旨とする三一教の教祖である。字は懋勳（懋勛）、號は龍江、子谷子、心隱子など。門徒からは「三教先生」、「三一教主」、「夏午尼氏道統中一三教度世大宗師」と尊稱された。莆田は李贄の鄕里の泉州に近いが、李贄と交際した形跡は無い。李贄と同樣、後世の朱子學者からは異端視されたが、在世時には士人から僧侶、道士に及ぶまで數千人の門徒を擁していた。

まず、蓬左文庫所藏『林子年譜』に據って、『四書標摘正義』及び『四書正義纂』の成立について考えてみよう。(5) この年譜に據ると、林兆恩は、正德一二年（一五一七）に誕生している。嘉靖六年（一五二七）に誕生した李贄より十歲年長である。林兆恩は、嘉靖一三年、一八歲の時、科擧の受驗資格者たる生員となるが、嘉靖二五年、三〇歲で鄕試に落第してからは、受驗を放棄し、道士卓晩春と親交を結ぶ。そして、嘉靖三〇年（一五五一）、三五歲で「歸儒宗孔」を說き始めて三一教を創始し、翌年、生員を辭退する。その後、福建を根據地として布教活動を展開している。

『四書標摘正義』に關連する記事を『林子年譜』から拾ってみると、隆慶元年（一五六七）五一歲の條に、「林子の諸書を編して名づけて『聖學統宗』と曰ふ」とあり、萬曆五年六一歲の條に、「復た劉獻策に命じて『四書正義』を標摘せしむ」とあり、更に萬曆一四年の條に、「陳大道に命じて『四書正義續』六卷を標摘せしむ」とある。また、萬曆一六年の條に、林兆恩が弟子の陳大道に編纂を命じた著書として『林子分內集』『四書標摘正義』六卷『正義續』六卷が擧げられている。そして、萬曆二〇年（一五九二）七六歲の條に、「二月、張洪都、陳標に命じて『四書標摘正義』を編次せしむ。又、『林子分內集』の諸書を摘して以てこれを益す。名づけて曰く『林子四書正義』凡そ二十册」とある。因みに『四書標摘正義』『四書標摘正義續』の各卷首第一行目では、それぞれ「林子四書標摘正義」「林子四書標摘正義續」と作っている。

年譜にいう『林子四書正義』二十册とは、萬曆五年、一四年編纂の『四書標摘正義』六卷と『四書標摘正義續』六卷を組み合わせ、かつ『林子分內集』など他の著作から增補を行った板本であると推測される。林兆恩の「四書標摘正義續自序」に、「『四書正義』及び『正義續』は、是れ乃ち劉生獻策、陳生大道、余の命を承けて以て余の『聖學統宗集』を摘錄してこれに標題するなり」と述べているように、『四書標摘正義』は、『聖學統宗集』を摘錄して標題をつけたものである。『聖學統宗集』の內容は、隆慶元年以前の林兆恩の所說である。

『四書正義纂』については、『林子年譜』に記錄がない。『林子年譜』

は、林兆恩が萬曆二六年正月に病死した後、十二年が經過した時點で、弟の林兆珂らの手によって刊刻されている。從って、『四書正義纂』の成立は、『林子年譜』が刊刻された萬曆三八年より後ということになる。『四書標摘正義』では、各卷首に重閱者名、校正者名、上梓者名が刻されているのに、『四書正義纂』にはそれらが無く、卷首第一行目を、「林子[illegible]」に作り、第二行目を「四書正義纂」に作っていることも、後刻本であることの傍證である。

『四書正義纂』の所論は、ほぼ『四書標摘正義』六卷及び『四書標摘正義續』六卷と重複しており、內容は全て林兆恩の說である。板式も、半葉九行、行一七字、有界、四周雙邊、板心黑口、單魚尾で各書とも共通である。

ただし、構成は、『四書標摘正義』及び『四書標摘正義續』が共に「論語」二卷「大學」一卷「中庸」一卷「孟子」二卷の順になっているのに對して、『四書正義纂』は、「大學」一卷「中庸」一卷「論語上」一卷「論語下」一卷「孟子上」一卷「孟子下」一卷の順になっており、この構成順は現存する『說書』と同じである。

以上を要約すると、林兆恩が嘉靖三〇年以降に說いた說を隆慶元年に編集した『聖學統宗集』から四書解釋を摘錄した『四書標摘正義』正續各六卷が萬曆五年、一四年に作られ、さらに『林子分內集』などの諸書の所說を加えて、萬曆二〇年に『林子四書正義』二十册が作られ、その後、萬曆三八年以降に『四書正義纂』六卷が刊刻されたということになる。但し、『四書正義纂』は分量的には『四書標摘正義』正續を併せた內容よりも少ない。

(2) 原刻『李氏說書』の成立時期

次に、『說書』の成立について考えてみよう。李贄は、萬曆一八年、親友の焦竑に宛てた書簡で『說書』に言及して、

又一種は、則ち學士ら題中の大旨に明らかならざるに因り、便に乘じて數句を寫してこれを貽す。積むこと久しくして帙を成す。名づけて『李氏說書』と曰ふ。中間亦甚だ觀る可し。如し數年未だ死せざるを得ば、『語』『孟』を將て節を逐つて發明し、亦人を快くするなり。(『焚書』卷一「答焦漪園」)

と述べており、李贄が六四歲、卽ち萬曆一八年頃に書いたと覺しき『焚書』の「自序」でも、『說書』四十四篇を刊刻したことを明記している。さらに、萬曆四六年(一六一八年)に刊行された『續焚書』卷首を見ると、晩年の李贄に師事した汪本釪が、

蓋し先生の書、未だ刻せざる者は、種種數を擢ぐるに勝へず。釪既に盡くは讀む能はず。……因りて未刻の『焚書』及び『說書』を搜し、兄の伯倫と相硏校讐す。『焚書』は因緣の語、感激の語多く、尋常の套語に比せざること、先生已に發明せり。『說書』は先生自ら龍湖に刻する者は什に二、未だ刻せざる者什に八。先ず二種を以てこれを剞劂に付し、餘は次第にこれを刻するを俟つ。(汪本釪「續刻李氏書序」)

と述べている。『李溫陵外紀』(蓬左文庫本)卷一所收の汪本釪「哭李卓吾先師告文」に據ると、汪本釪が李贄に師事した時期は、最晩年の九年間である。『說書』が、萬曆一八年の時點では、『大學』『中庸』に關する所說と推定される四十四篇しか刊行されておらず、萬曆四六年の時點で、『論語』『孟子』に關する部分を含む全書が刊刻されたということには、かなりの信憑性があると考えられる。

なお、『李溫陵集』卷四には、『說書』に言及した書簡「復焦弱侯」が收められている。この書簡には、『論語』學而篇末章に關する「不

患人之不己知患不知人說書一篇」及び、顏淵篇第二章に關する「出門如見大賓篇說書」の二篇が擧げられている。この焦竑に宛てた書簡には、李贄自身が「今年六十三」と明記しているので、『論語』に關する草稿が存在していたことは明らかである。また、『續焚書』には、李贄が『說書』に寄せた自序が收錄されている。李贄は、『說書』を刊刻した理由について、

既に表暴するを惡めば、則ち宜しく書を刻するを惡むべきに、卒に自ら犯すは何ぞや。則ち此の書は聖學に關する有り、治平の大道に關する有るを以て、敢へて表暴するを惡むを以ては遂に已めざるなり。……倘し大賢君子の修、齊、治、平の學を講ぜんと欲する者有らば、則ち余の『說書』は、其れ一日も目に呈せざる可けんや。（『續焚書』卷二「自刻說書序」）

と述べており、經世の書としての『說書』に自信を持っていたことが伺われる。この序は、『李溫陵集』にも收錄されている。『李溫陵集』は、東林派の顧大韶（字は仲恭）が、萬曆三〇年の李贄の自殺から「十有餘年」が經過した時點で編纂した文集であり、その刊行時期は『續焚書』とほぼ同じ頃と考えられる。[8] 李贄自刻『說書』及び汪本鉶の原刻『說書』は佚書となっており、現在その存在は不明である。

（3）現存『李氏說書』の成立時期

現存する『說書』の成立時期について考えるに當たり、まず、卷首の如眞道人の「李氏說書序」について見ておこう。如眞道人について、萬曆三七年（一六〇九）に卒した李登（字は士龍、號は如眞）と斷定するには、號が同じであるという以外、有力な證據がない。『續焚書』卷一に李贄が李登に宛てた書簡「復李士龍」が載っていることからも分かるように、李登は李贄と交際があった人物である。また、『本朝分省人物考』卷一二所載の李登の傳記に據れば、隆慶年間には耿定向の推薦を受けて南京國子監に入學するなど、篤學實直な人物として描かれている。周知のように、耿定向は李贄の論敵であり、如眞道人が李登ならば、李贄に言及しないのは、不自然である。從って、如眞道人が李登である可能性は少ないと思われる。「李氏說書序」では、孔子から曾子、子思、孟子と受け繼がれる儒敎の道統を論じて、

夫れ說書は、何の書ぞや。孔・曾・思・孟の書を說くなり。孔・曾・思・孟の書は、何の書ぞや。孔・曾・思・孟の著す所の書は言を立てて以て天下萬世を敎ふる所以の者なり。豈に吾が心の中、吾が心の一を外にすること有らんや。如し能く吾が心の中、一を明らかにして以て孔・曾・思・孟の書を說くこと有れば、豈に其れ孔・曾・思・孟の眞實義を得ざらんや。（中略）若し其の心性の大を忘れて、惟だこれを陳辭故紙に索むる者は、此れ章句の儒、見聞の小なるのみ。又安んぞ能く孔・曾・思・孟の所謂中、所謂一を得て、世に曠らかにして相感ぜしめて、以て其の道統の傳を續がんや。是れ序と爲す。如眞道人題す。

と述べている。これは、『四書標摘正義』及び『四書正義纂』に見える林兆恩の道統に關する見解と一致している。林兆恩は、孟子が、堯・舜から孔子に至る儒敎の道統を揭げ、孔子への私淑の念を「予未だ孔子の徒たるを得ざるも、予私かに諸を人に淑くするなり」（離婁下）と表明したことに關して、

聖人の百世に曠らかにして相感ぜしむる所以の者は、此の眞心なり。而して聖人の道は此に統べらる。故に道統と曰ふ。堯・舜は此の眞心を得て、これに命じて中と曰ふ。以て此の道統の原を開くなり。孔子は此の眞心を得て、これに命じて一と曰ふ。以て此

の道統の傳を紹ぐなり。(『四書正義纂』孟子下「由堯舜至於湯」)

見て知るは、見て此の眞心を知るなり。聞きて知るは、聞きて此の眞心を知るなり。惟だ曾氏の傳のみ獨り其の宗を得るは、此の眞心を宗とするを得るなり。孟子、「予は私かに諸を人に淑くす」と曰ふは、此の眞心に私淑するなり。(同上)

と述べている。この文章は『四書標摘正義』卷六「道統」と同文である。從って、序文に見える道統論は林兆恩の見解の燒き直しと見なすことができる。また、李贄の「自刻說書序」が冠されていないという事實は、この書物の編纂者が初刻の『說書』はもちろん、萬曆四六年刊刻の『續焚書』や『李溫陵集』を參照していないということを意味している。從って刊行は萬曆四六年より前であると推測できる。

また、現存『說書』卷九「下孟」の離婁篇「人之所以異於禽獸四章」には、萬曆二四年冬から萬曆二五年春に記錄された『明燈道古錄』末章の全文がそのまま轉載されている。『道古錄』の刊本から轉載したとすれば、刊行の上限は萬曆二六年以降ということになるが、李贄生前に『說書』が全篇刊刻された形跡がないこと、內容と構成が『四書正義纂』に共通している點があることを考え併せると、現存『說書』も、『四書正義纂』と同樣に、萬曆三八年以降に成立したものと考えられる。成立の下限は、萬曆四五年に痂嗜軒が刊刻した『李氏六書』所載の顧大韶「說書刪定小記」に、

乃ち說く者、莆田の林龍江の手に出づと謂ふは、何ぞや。龍江は、道人なり、亦た說書有り、莆多くこれを宗とす。豈に『李氏說書』亭州に刻せし時、好事者、其の編帙を廣くして以て厚貲を博さんと欲してこれが增入を爲せしか。抑(は)た先生嘗て龍江と一再來往し、偶〻其の中に混じ、刻する時は先生の意に非ざれば、以て訂正に及ばざるを致せしか。

とあるので、萬曆四五年以前である。萬曆四五年の時點で、顧大韶は、林兆恩の四書解釋が『說書』に混じっている理由について、好事家が利益を目論んで『說書』に林兆恩の說を增入したものか、あるいは、李贄が林兆恩と交際があったので、いつのまにか林兆恩の所說が著作に紛れ込み、『說書』が出版された時に、訂正を加えなかったためであろうと推測し、當時存在した『說書』の『論語』『孟子』に關する部分を削り、『大學』『中庸』部分のみ殘したと述べているのである。因みに『李氏六書』には、『說書學庸』一卷のみ收錄されている。

管見に據れば、李贄と林兆恩が交際した形跡は皆無であり、交際中に著作が紛れ込んだ可能性はないと思われるが、好事家が利益を目論んで林兆恩の說を『說書』に增入した可能性については檢討の餘地がある。

ところで、現存『說書』各卷首に「李載贄編緝(輯)・林兆恩閱著」を標榜している點について言えば、李贄は、隆慶元年に皇帝の名を避けて「載贄」から「贄」に改名しており、自ら「載贄」と稱することはありえない。また、林兆恩は、萬曆二六年正月に死んでいるので、現存する『說書』を著すことは不可能である。李贄と林兆恩が現存する『說書』の成立に直接關與していないとすれば、現存の『說書』は、第三者の手になると考えるのが妥當である。

要するに、現存『說書』の刊行時期は萬曆三八年以降、萬曆四五年以前であり、萬曆四〇年(一六一二)前後に李贄と林兆恩以外の第三者によって編纂されたものと推測される。『四書標摘正義』正續がそれぞれ「論語」「大學」「中庸」「孟子」の順に構成されているのに對して、『四書正義纂』は「大學」「中庸」「論語」「孟子」の順で、現存『說

書』と同じ構成である。兩書の關係を明らかにするには、本文を比較檢討せねばならない。

二　『李氏說書』と『四書正義纂』との比較

『四書正義纂』六卷は、「大學」「中庸」「論語上」「論語下」「孟子上」「孟子下」各一卷から成るのに對して、『說書』九卷は、「大學」一卷「中庸」二卷「上論」二卷「下論」二卷「上孟」一卷「下孟」一卷から成り、卷立てが異なっている。また、『四書正義纂』の板式が、半葉九行、行一七字、有界、四周雙邊、黑口、單魚尾であるのに對して、『說書』は半葉九行、行二〇字、無界、四周單邊、白口、單魚尾となっていて、板式が異なっているのは一目瞭然である。そこで、比較の便宜上、まず、四書の各卷首を對置して見よう。

『李氏說書』	『四書正義纂』
大學統論 時有訪卓吾於豫章之北沙寄室、與李卓吾談大學、適有客至而李子未之答也…… 中庸統論 卓吾曰、中也者中也、堯舜所允執之中也、易曰、河出圖、洛出書、聖人則之…… 論語統論 卓吾曰、余每令諸生熟讀魯論、乃復訊之曰、諸生既熟讀魯論矣…… 孟子統論 卓吾曰、孟子之所謂仁義、非他也、性善之根於心也、孟子曰、君子所性…… （人名の四角と傍點は筆者が付した。）	大學統論 時有訪林子於豫章之北沙寄室、與林子談大學、適有客至而林子未之答也…… 中庸統論 林子曰、中也者中也、堯舜所允執之中也、易曰、河出圖、洛出書、聖人則之…… 論語統論 林子每令諸生熟讀魯論。乃復訊之曰、諸生既熟讀魯論矣…… 孟子統論 林子曰、孟子之所謂仁義者、非他也、性善之根於心也、孟子曰、君子所性…… （人名の四角と傍點は筆者が付した。）

右の對照表を一見しただけで、『說書』と『四書正義纂』が酷似していることが分かる。違っている點は、『說書』で「卓吾」「李卓吾」「李子」に作っている個所が、『四書正義纂』では「林子」に作っていること、傍點を附した各字の箇所が兩書で異なっているということだけである。これらの事例から、先行する『四書正義纂』を改竄したのが『說書』ではないかという疑問が生ずるが、斷定するには、やはり全編に渡って比較する必要がある。比較した結果、兩書には重複部分と相違部分があることが判明した。

(1)　重複部分

現存する『說書』九卷の內で、卷一から卷八までは、項目も內容も大部分が『四書正義纂』と重複している。分量的には『說書』の方が多い。『四書正義纂』になくて『說書』に有る部分は、『四書標摘正義』などの林兆恩の他の著作に見いだせる所說であるが、『四書正義纂』で「林子」となっている箇所を『說書』では「卓吾」「李子」「卓子」などに作り變えている。中には杜撰な改竄の例も見受けられる。例えば、卷一「大學」第一六葉表では「林子」のままにし、卷二「中庸統論」第四葉末では、作り變える必要のない「程子」をわざわざ

「卓吾」に變え、卷三『中庸』第一一葉裏では、作り損ねて「林吾」などとし、『論語』子路篇「必也正名乎」の條では、「卓吾」と「兆恩」を混在させている。この條は、『四書正義纂』には無いが、後半の自稱の「兆恩」をそのままにしている部分は、『林氏續稿』卷三「三綱」第三條に同一の文章が見える。「兆恩」の名は、卷八の「上孟」卷末の第五三葉にも見える。恐らく、機械的に「林子」のみを「卓吾」に作り變えて、「兆恩」まで注意が行き届かなかったので、このような噴飯ものの事例が見受けられるものと思われる。また、『四書正義纂』では、『論語』公冶長篇の「願聞子之志」（子の志を聞くを願ふ）という句を標題として掲げているが、『說書』卷四「上論」第四五葉表では、「願文子之志」に作るなど、『說書』には誤脫が多く見受けられる。

以上の事例から推して、現存『說書』は內容から言えば『四書正義纂』の增補改竄版にあたっている。現存『說書』の方が『四書正義纂』よりも分量的には一割程度多いので、萬曆二〇年成立の『林子四書正義』の系統に屬する板本に依據している可能性がある。『四書正義纂』そのものを增補改竄したのか、それとも『四書正義纂』の增訂版に相當する板本があって、それを底本として改竄したのか、いずれかであると推定されるが、編集改竄の杜撰さから推して、『四書正義纂』そのものに增補した上で改竄を加えたとは考えにくい。いずれにせよ、現存『說書』の卷八までは、林兆恩の所說を剽竊したものである。

（2）相違部分

次に相違部分を調べてみよう。『說書』では、卷八「上孟」第四九葉から五一葉にかけては、『四書正義纂』卷五「孟子上」と同樣に「秋陽」の條の全文が收錄されているが、五一葉第八行目以降は、『四書正義纂』とは全く違う內容になっている。

『四書正義纂』卷五では、「秋陽」の次は「勇士不忘喪其元」「冠義」「居天下之廣居」「君子未嘗不欲仕」「父母之心」「迫斯可見」「孔子懼作春秋」「楊墨」「孔子之道不著」「能言距楊墨者」となっているのに、『說書』では、「秋陽」と同趣旨の發言を、林兆恩の『夏語』などから、五三葉第一行目まで收錄し、次は「夷子思以易天下」の條だけで卷八「上孟」を終わっている。

さらに、『說書』卷九「下孟」について調べてみると、『四書正義纂』卷六「孟子下」の內容とは全く異なっており、次の表のように、その文章の大半が李贄や王守仁の文章の剽竊であることが確認できる。

『李氏說書』卷九「下孟」	原資料
①第一葉表 離婁篇「人之所以異於禽獸四章」 卓吾曰、人與禽獸全然不同、孟子何以但言幾希。曰、禽獸雖殊類、然亦有良知……	『明燈道古錄』下卷第二四章全文 ［劉用建曰］人與禽獸全然不同、孟子何以但言幾希。曰、禽獸雖殊類、然亦有良知……
②第五葉裏 又問人倫物理。卓吾曰、穿衣喫飯卽是人倫物理、除却穿衣喫飯、無倫物矣……	『焚書』卷一「答鄧石陽」 穿衣吃飯卽是人倫物理。除却穿衣吃飯、無倫物矣……
③第六葉裏 離婁篇「人之患在好爲人師」 劉憲長遣童子前來求師。卓吾以書與之曰、自孔子後、學孔子	『焚書』卷一「答劉憲長」全文 自孔子後、學孔子者、便以師道

者、便以師道自任……	自任……
④第八葉表 離婁篇「中也養不中二句」 或問、中也養不中、才也養不才、而人何以養。卓吾曰、古聖之言、今人多錯會、是以不能以人治人……。	『焚書』卷二「與友人書」全文 古聖之言、今人多錯會、是以不能以人治人……
⑤第一〇葉裏 離婁篇「大人不失赤子之心」 或問不失赤子之心。卓吾曰、在予童心說矣、夫赤子之心、童心也、童心者眞心也、縱假純眞……雖有天下之至人、其湮沒于假人而不盡見於後世者又豈少哉。何也、天下之至人未有不本於赤心焉者也。嗚呼、吾又安得眞正大聖神人赤心未曾失者而與之爲大人哉。	『焚書』卷三「童心說」 夫童心者眞心也……夫童心者絕假純眞……雖有天下之至文、其湮滅于假人而不盡見于後世者豈少哉。何也、天下之至文、未有不出于童心焉者也。……嗚呼、吾又安得眞正大聖人童心未曾失者而與之一言文哉。
⑥第一三葉表　告子篇「夜氣」 卓吾曰、夜氣是就常人說、學者能用功、則日間有事無事、皆是此氣翕聚發生處。	『傳習錄』卷上の一節 夜氣是就常人說、學者能用功、則日間有事無事、皆是此氣翕聚發生處。
⑦第一四葉表　告子篇「操舍」 或問操舍存亡。卓吾曰、出入無時、莫知其鄉……明道所謂腔子、亦只是太虛而已。雖終日應酬而不出太虛、卽是在腔子裏……。	『傳習錄』卷上の一節 澄問、操存舍亡章曰、出入無時、莫知其鄉……程子所謂腔子、亦只是天理而已……雖終日應酬而不出天理、卽是在腔子裏……。
⑧第一五葉表 告子篇「夫道若大路然」 來書云、道之大端易於明白。……卓吾曰、道之大端易於明白、此語誠然……但惟聖人能於倫物上加明察、而愚夫愚婦不能、此聖愚之所以分也……而其所謂學者、正惟明察倫物以實見此太虛空之性、而與後儒支離澶漫之學不同耳。吾子未能明察得眞空而汲汲焉顧是之憂……。	『傳習錄』卷中「答顧東橋書」一節 來書云、道之大端易於明白。……、道之大端、易於明白、此語誠然……但惟聖人能致其良知、而愚夫愚婦不能致。此聖愚之所由分也……而其所謂學者、正惟致其良知以精察此心之天理而與後世之學不同耳。吾子未暇良知之致而汲汲焉顧是之憂……。
⑨第一八葉裏 盡心篇「若夫豪傑之士」 卓吾以書與弱侯曰、人猶水也、豪傑猶巨魚也、欲求巨魚、必須異水、欲求豪傑、必須異人……。	『焚書』卷一「與焦弱侯」全文 人猶水也、豪傑猶巨魚也。欲求巨魚、必須異水。欲求豪傑、必須異人……。
⑩第二〇葉表　盡心篇「以佚道使民雖勞不怨以生道殺民雖死不怨殺者」 或問佚道生道。卓吾曰、民之初生若禽獸然、穴居而野處、拾草木之實以爲食……	『焚書』卷三「兵食論」全文 (『藏書』卷三五「張載傳」) 民之初生、若禽獸然。穴居而野處、拾草木之實以爲食……

(傍線と括弧は筆者が付した。)

右のように、巻九「下孟」全三十葉の内、實に十七葉分が李贄や王守仁の所説と酷似しているのである。例えば、巻頭の①の例は、萬曆二五年成立の『明燈道古錄』からの剽竊である。『道古錄』は、李贄が劉東星（一五三八～一六〇一）、劉用相父子らと問答した記錄である。①の下段に示したように、劉東星の甥の劉用建の質問に李贄が答えたのが「曰く」以下の言葉である。[8] それを『説書』では李贄の自問自答の形に改竄している。また、②③④⑤及び⑨⑩は『焚書』から、⑥⑦⑧は『傳習錄』から剽竊改竄した文章である。[9] その他の部分は、林兆恩の所説を引いているが、内容は『四書正義纂』巻六（全七六葉）とは全く別である。

以上の事實から、『説書』の僞作者が、最も力を注いでいるのは、巻九「下孟」の部分であると言える。僞作者はどのような立場から、どのような意圖で剽竊改竄を行ったのであろうか、改竄の意圖を探るため、⑤と⑧の例について檢討してみよう。

(3) 改竄の意圖

まず、⑤の例を取り上げてみよう、改竄者は有名な李贄の童心説について、「童心」を「赤心」に作り變え、「天下の至文、未だ童心より出でざる者有らざるなり。……嗚呼、吾又安んぞ眞正の大聖人の童心未だ曾て失はざる者を得てこれと與に一たび文を言はんや」については、中間の經書の相對性を説いている部分を削除し、「天下の至人、未だ赤心に本づかざる者有らざるなり。嗚呼、吾又安んぞ眞正の大聖神人の赤心未だ曾て失はざる者を得てこれと與に大人と爲らんや」と作り變えて、『孟子』離婁下篇の「大人は赤子の心を失はず」の解釋としてふさわしい表現にしている。ここで注目されるのは、「童心説」の核心とも言うべき、過激な經書批判の一節が削除されていることである。「童心説」では、『六經』『論語』『孟子』に絶對的權威を認めず、

夫れ『六經』『語』『孟』は、其の史官の過ぎて褒崇を爲すの詞に非ざれば、則ち其の臣子の極めて贊美を爲すの語なり。又、然らざれば、則ち其の迂闊の門徒、懵懂の弟子、師説を記憶するに、頭有りて尾無く、後を得て前を遺れ、其の見る所に隨つて、これを書に筆するのみ。……是れ豈に遽に以て萬世の至論と爲す可けんや。然らば、則ち『六經』『語』『孟』は、乃ち道學の口實、假人の淵藪なり。（『焚書』巻三）

と述べている。この部分を削除しているということは、「童心説」の改竄者が經書に對して保守的立場を取っていることを示している。また、「至文」と「大聖人」について、道敎系の「至人」「大聖神人」に作り變えている點も注目される。

次に、⑧の例を檢討してみよう。⑧が『傳習錄』の「答顧東橋書」の一節を改竄したものであることは、楠本博士が夙に指摘し、岡田博士は、『説書』が王守仁の致良知説を受用して、それを三敎歸儒の論に改變した過程を示すものと見なしている。『傳習錄』に、

但惟だ聖人のみ能く其の良知を致して愚夫愚婦は致すこと能はず。此れ聖愚の由りて分かるる所なり。……而して其の所謂學なる者は、正に惟だ其の良知を致して以て此の心の天理を精察して、後世の學と同じからざるのみ。吾子未だ良知をこれ致すに暇あらずして、汲汲焉として顧つて是れをこれ憂ふ。

とあるように、王守仁は致良知説を提唱し、良知を實現するには、聖人のように主體的に實踐努力せねばならぬと説いている。ところが、この言葉を剽竊した⑧では、

但惟だ聖人のみ能く倫物上に於いて明察を加えて、愚夫愚婦は能

はず。此れ聖愚の分かるる所以なり。……而して其の所謂學なる者は、正に惟だ倫物を明察して以て此の太虛空の性を實見して、後儒の支離澶漫の學と同じからざるのみ。吾子未だ能く眞空を明察し得ずして、汲汲焉として顧つて是れをこれ憂ふ。

と改竄している。つまり、「良知を致す」を「倫物を明察す」「眞空を明察す」とし、「心の天理」を「太虛空の性」としている。「倫物上に於いて眞空を識る」という表現は②にも見えており、李贄の言葉を使ったものと思われる。但し、王守仁が重視した致良知說を悉く改竄しているという事實は、僞作者が、陽明學派の人物でないということを示していると思われる。また、僞作者は、⑦の例でも「天理」を「太虛」に作り變えている。「太虛」を重視する例は、林兆恩の著作にしばしば見えるので、僞作者は、林兆恩に引き付けて『傳習錄』や『焚書』の文を改竄していることが確認できる。從って、僞作者は、林兆恩の所說に精通した道敎系の人物であると推測できる。

『說書』が卷八の末尾から『四書正義纂』と完全に食い違っている理由としては、僞作者の用いた底本に落丁か、缺落部分があったのではないかと推測される。さもなければ、底本に據って容易に僞作できたはずであり、卷九のみ苦勞して作り上げる必要はあるまい。或いは、當時人氣の高かった李贄の名を冠する四書解釋書を出版して暴利を貪ろうとした書肆の依頼で、僞作者が本物らしく見せるため腕を振るったとも考えられる。

三　林兆恩と李贄の思想上の異同

さて、明代においては、太祖朱元璋が儒佛道三敎を公認し、三敎を政治的統制下に置くべく『三敎論』を著して以來、三敎が公然と鼎立しており、林兆恩も、「三敎合一なる者は、合してこれを一にするに孔子の儒を以てするなり」（『林子續稿』卷四「非三敎小引」）と述べているように歸儒宗孔を標榜している。そして、歸儒宗孔を唱えた理由について、

今、道釋者流は、顧乃つて君臣の義、父子の仁、夫婦の別を棄て去りて、古の聖人の人に敎ふる所以の者と異なれり。又、これを聖人の缺典と謂はずや。此れ區區の歸儒の敎への由りて立つ所なり。（『四書標摘正義』卷六「缺典報札」）

と述べている。林兆恩の三敎合一論のねらいは、儒佛道の排他的門戸の見地を排し、道敎徒佛敎徒にも儒敎道德を遵守させ、儒敎と二敎が相爭うことなく相互補完的に社會の治安に役立つよう指導することにあった。

李贄もまた、「三敎歸儒說」（『續焚書』卷二）を著し、太祖と成祖の文集から三敎合一論を採集して『三敎品』を編纂し、『老子解』『莊子解』『淨土決』など、道敎佛敎の敎典に關する著作を殘している。林兆恩も李贄も確かに三敎歸儒を說いているのであるが、兩者の著作を通覽して見ると、必ずしも同一視できない見解が數多く見受けられる。

そこで、林兆恩と李贄の兩者の思想上の異同を明らかにするため、便宜上、『四書正義纂』に見える林兆恩の孔子、孟子、朱子學に關する言說を例として、李贄の見解と比較してみよう。なお、『四書正義纂』の說は『四書標摘正義』にも見える。[19]

(1)　孔子に關する言說の一例

『論語』先進篇に、「子張、善人の道を問ふ。子曰く、迹を踐まず、亦た室に入らず」とある。この「迹を踐まず」について林兆恩は、

迹は履むに出づるなり。而して足の履む所の者は迹なり。故に吾の心は、卽ち孔子の心なり。而して吾の心を信ずれば、則ち其の行なふ所は、皆孔子の行ひなり。吾の足は、卽ち孔子の足なり。而して吾の足を信ずれば、則ち其の迹づくる所は皆孔子の迹なり。其の室に入らずと曰ふは、孔門の心法有るを知らざるを以てなり。故に其の心に事へて孔子なること能はざるなり。

（『四書正義纂』卷四「不踐迹」）

と述べている。自分の心を信じて行動すれば孔子と一體化できると說いているこの章は、現存『說書』卷六「下論」第二六葉にも收められている。林兆恩はこのように、極めて樂天的に自己と孔子との一體化の實現を說いている。

これに對して、李贄は、「善人」を『論語』子路篇の「中行を得てこれに與せずんば、必ずや狂狷か。狂者は進みて取り、狷者は爲さざる有り」の「狂者」と結びつけて解釋し、「不踐迹」について、

夫れ人の終に成らざる所以の者は、謂へらく、其の顰に効ひ步を學び、徒らに前人の迹を慕ふを爲せばなり。前人の往けるを思はず。過ぎし所の迹も、亦た其の人と俱に往く。尙ほ如何ぞこれを踐まん。……夫れ大人の學、至善に止どまる。至善なる者、無善の謂なり。善無ければ、則ち迹無し。尙ほ如何ぞこれを踐まん。然らば則ち但だに踐むを必せざるのみならず、踐む可からず。當に踐む可からず、これを踐まんと欲すと雖も得ざる者なり。夫れ孔子は迹に非ざるか。（『藏書』卷三二「孟軻」附「樂克論」）

と述べている。「迹を踐む」とは、聖人の求道の足跡を形式的に眞似るだけで、眞意を汲まないことであると解釋している。換言すれば、禪の「沒蹤跡」の立場から、道を悟る上で手本となる足跡など無いのだと解釋しているのである。禪僧が師の見識を越える見識を備えなければ師の法を嗣げないように、儒者は、孔子を越える見識が無ければ孔子の道を嗣ぐことはできない、というのである。李贄はまた、

蓋し、狂者は古人を下に視、一身を高く視て、以爲へらく、古人は高しと雖も、其の跡往けり、何ぞ必ず彼の跡を踐むを爲さんやと。是れを志大と謂ふ。故を以て放言高論し、凡そ其の身の爲す能はざる所と、其の敢へて爲さざる所の者も、亦意に率ってこれを妄言す。是れを大言と謂ふ。……渠、世の桎梏已甚しく、卑鄙にして厭ふべきを見て、益々以て其の狂言を肆にす。……又、其の狂を愛し、其の狂を思ひ、これを稱して善人と爲し、これに望むに中行を以てすれば、其の狂以て章を成す可く、以て室に入る可し。僕の謂ふ所の夫子の狂を愛する者此れなり。

（『焚書』卷二「與友人書」）

と述べている。古人の足跡を眞似ず、世俗に同化しない「狂者」に共感を寄せるこの文章は、皮肉なことに、そのまま現存『說書』卷九（對照表④）に全文收錄されている。李贄は主著『藏書』の序で、「後の三代、漢唐宋是れなり。中間千百餘年にして、獨り是非無きは、豈其れ人に是非無からんや。みな、孔子の是非を以て是非と爲す。故に未だ嘗て是非有らざるのみ」と述べているが、これは「跡を踐まず」、聖人の敎えを獨自の立場で承け繼ぐには、安易に孔子に依據するだけではだめだと戒めているのである。林兆恩の見解とはかなりの違いがあると言わねばならない。

（2）孟子に關する言說の一例

『孟子』滕文公下に、「楊氏は我が爲にす、是れ君を無みするなり。墨子は兼愛す、是れ父を無みするなり。父を無みし君を無みするは、

是れ禽獸なり」とある。林兆恩は、孟子が墨子の兼愛說を排擊したことを支持して、

孟子の楊墨を禽獸とする所以の者は、以て其の心を禽獸とするには非ざるなり。乃卽ち其の行ふ所の事に禽獸に類すること有ればなり。蓋し禽獸の生まるるや、固より父有るを知らず。而して其の母を離るるに至れば、又且母有るを知らず。所謂至親を視ること路人に異なる無し。是れ父を無みするなり。各自生を爲し、各自養を爲し、君長を相けず、上下を相けず。是れ君を無みするなり。（中略）故に庶民は仁を去る者なり。而して墨氏は則ち父子の仁を外にするを以て仁と爲す。不仁に非ずして何ぞや。況んや兼愛を以てして孔子の仁をして著らかならざらしむるをや。

（『四書正義纂』卷五「孟子統論」）

と述べている。そして、「墨子の父を無みするは、これを仁を賊なふの賊と謂つて可なり」（同上）と斷罪している。

一方、李贄は、林兆恩と異なり、墨子を高く評價し、『墨子批選』を著している。[11] 例えば、李贄は墨子の博愛主義を擁護して、「兼愛とは、相愛するの謂なり。人をして相愛せしむるを、何ぞ仁を害なふと說く。……我、人の父を愛し、然る後、人、皆我の父を愛す。何ぞ父を無みすると說く」（『墨子批選』兼愛篇評）と述べて、孟子に反駁している。李贄はまた、政治上有益であるという觀點から『墨子』の儉約論を顯彰して、

禹の學、後に傳はりて墨翟と爲る。則ち夫子に時を同じくし、時に天下並びにこれを重んず。故に其れ稱して孔墨と曰ふ。孔子は禹を稱し、而して墨翟の儉をば、敢へて闢きて以て非と爲さず。蓋し其の傳の自る有るを信ずればなり。今、墨子の書具在す。能く其の書を取りて、これを讀みて、其の樂を非とする所以の意を得る有れば、則ち經綸の術備はる。斷斷乎として以て天下を平かにして四海を均しくす可きなり。作用手段、各各相同じからずと雖も、然れども但だ以て太平を致す可し。亦何ぞ必ずしも一律に拘らんや。孟氏、父を無みするを以てこれを闢くは、過てり。

（『明燈道古錄』下卷第二三章）

とも述べている。『墨子』の主張が經世濟民に有益であると認めた李贄は、墨子を顯彰する上で障碍になっている孟子を批判したのである。林兆恩とは對照的である。

（3）朱子學に關する言說の一例

『四書正義纂』の『論語』解釋について見ると、爲政篇「攻乎異端」章の「異端」について、「佛老」と解釋せずに、三敎の宗旨の違いに固執する宗派意識と解したり、顏淵篇「克己復禮」の「己」を身の私欲と解釋せず、肯定的自己と解釋するなど、朱熹『四書集注』と齟齬する例が多く見受けられる。林兆恩はそのことを自覺し、朱子學の權威を相對化すべく、

孔子の經、既に離る可からざれば、則ち曾子の傳、其れ違ふ可けんや。故に兆恩寧ろ稍〻朱子の註に悖るも、寧ろ少しも曾子の傳に違ふ者毋きは、正に此を謂ふのみ。蓋し道は公道なり。孔・曾・思・孟の相授受する所の道にして朱子一人の私するに非ざるなり。（『四書正義纂』卷一「大學」末尾「傳」）

と述べている。林兆恩は、『論語』里仁篇の「一以てこれを貫く」の解釋においても、「一」を「心」と解釋し、朱子を超えて孔子、曾子、子思、孟子に自己の心を直結させ、道統の繼承者を自任している。

一方、李贄は、陽明學を信奉し、三敎歸儒を唱え、經世を重視する

視點から朱子學の道德至上主義を批判し、道統論を否定している。[12] 林兆恩も、朱子學に異を唱えて、三敎合一を唱えてはいる。しかし、李贄が、主に儒敎と禪を思想的基盤として官僚の僞善的實態を暴露し、當局の彈壓を受けたのとは異なり、林兆恩は、主に儒敎と道敎を思想的基盤として儒佛道三敎の融合と體制內融和を目指して活動しており、その三一敎は保守的宗敎色が濃厚である。[13] そのことは、孔子や孟子に對する見解からも窺い知ることができる。

李贄と林兆恩の思想を同一視することはできない。從って、現存の『說書』に據って李贄の思想を語ることは愼まねばならない。

おわりに

『說書』九卷と『四書正義纂』六卷とを比較した結果、大部分が重複していることが判明したが、同時に、『說書』の方が『四書正義纂』よりも一割程度分量が多く、末尾は內容が全く異なっていること、卷九には『道古錄』や『焚書』及び『傳習錄』の文章を剽竊改竄した文章が多く見えることなどを確認した。從って、『說書』が僞書であることは疑問の餘地が無い。また、『說書』九卷は刻字の脫誤が多く見受けられる杜撰な板本であり、『四書正義纂』を底本として僞作者が全編に涉って增補したものとは考え難い。

『說書』が卷八の末尾から『四書正義纂』と完全に食い違っている理由としては、僞作者の用いた底本に落丁か、缺落部分があったのではないかと推測される。或いは、僞作者が本物らしく見せるため腕を振るったとも考えられる。僞作者は、林兆恩に引き付けて『傳習錄』の致良知說や『焚書』の文を改竄しているので、林兆恩の所說に精通した道敎系の人物であると推測できる。

林兆恩の四書解釋を纏めた書物としては、『四書標摘正義』や『四書正義纂』よりも分量が多い萬曆二〇年編纂の『林子四書正義』があり、また、萬曆年間に繰り返し『四書標摘正義』が編纂されていることから推して、林兆恩の『四書正義』は複數存在しているものと考えられる。僞作者が用いた底本は、『四書正義纂』の增補版の系統に屬する版本で、末尾が缺落しているか落丁があったものと思われる。[14]

なお、僞作の『說書』には六卷本、不分卷本、十卷本も現存する。『說書』六卷本及び不分卷本の標題には「王敬宇藏板」とあり、萬曆年間の書林王敬宇が刊刻した板本であることが知られている。六卷本と不分卷本の內容は、分卷の方式が異なるだけで九卷本と同一のようである。『說書』六卷本及び不分卷本の構成は、『四書正義纂』六卷と同じで、「大學」「中庸」「論語」「孟子」の順になっている。

『四書正義纂』の卷數と一致している點から考えると、六卷本の方が九卷本よりも古いと思われる。僞作『說書』の刊行時期は萬曆三八年以降、萬曆四五年以前と推定できるので、王敬宇藏板が最も古い板本であるとすれば、その刊行時期は萬曆四〇年前後ということになる。

また、『說書』六卷本は、崇禎年間に信筆齋が刊刻した『李氏全書』にも收錄されているが、「論語統論」等を含んでいること、板式が半葉九行、行二〇字、白口、四周單邊である點で九卷本と一致することから、九卷本と同じ系統に屬すると推定される。殘念ながら、李贄自刻の『說書』四十四篇及び萬曆四六年汪本鉶原刻本の存在は不明である。本稿において推定した『說書』關係の板本系統表を末尾に揭げ、博雅の御批正を仰ぐ次第である。

注

(1) 楠本正繼「焚書と說書」(『中國の名著』勁草書房、一九六一) を參照。この論文は後に楠本正繼『宋明時代儒學思想の研究』(廣池學園出版部、一九六二) 第二編第五章に「李卓吾」と改題して收錄されている。なお、楠本博士が九州大學に寄贈した『李氏說書』九卷と尊經閣文庫所藏『李氏說書』九卷は同一の板本である。

(2) 岡田武彥『王陽明と明末の儒學』(明德出版社、一九七〇) を參照されたい。

(3) 崔文印「今傳本《李氏說書》眞僞考」(『中國哲學』第一輯、新華書店、一九七九) を參照されたい。

(4) 內閣文庫所藏四十卷本『林子全集』の詳細は、間野潛龍『明代文化史研究』(同朋舍、一九七九) 第五章に詳しい。なお、學習院所藏『林子全書』については、小柳司氣太『東洋思想の研究』(關書院、一九三四) 所載「明末の三敎 (主として林兆恩と李卓吾)」を參照されたい。

(5) 間野潛龍『明代文化史研究』(前揭) 卷末の蓬左文庫『林子年譜』影印を參照。

(6) 『顧仲恭文集續刻』所收「溫陵集序」を參照されたい。

(7) 陳錦釗『李贄之文論』(臺灣、嘉新水泥公司文化基金會、一九七四) 二〇頁、二一頁を參照。

(8) 『明燈道古錄』(『遵道錄・明燈道古錄』臺灣、廣文書局、一九八三) に據る。但し、『李卓吾叢書』及び『李溫陵集』に收錄されている『道古錄』には、「劉用健曰」の四字が無い。

(9) 對照表の⑤について最初に指摘したのは楠本正繼「焚書と說書」(一九六一) であり、繼いで②⑤⑧⑨⑩については、岡田武彥『王陽明と明末の儒學』(一九七〇) が指摘し、③④を崔文印「今傳本《李氏說書》眞僞考」(一九七九) が指摘している。①⑥⑦は筆者が新たに確認したものである。

(10) 『四書標摘正義』については、拙稿「林兆恩『四書標摘正義』――三敎合一論者の「心卽仁」――」(『論語の思想史』汲古書院、一九九四) を參照されたい。林兆恩は、周敦頤の太極圖說や張載の太虛說などの先行する諸思想を混合し、「心」を「一」「中」「太極」「眞心」などと表現し、「心は卽ち仁」であると提唱している。「心卽仁」とは、他者を生かし救濟せんとする靈妙な心の働きが「仁」であり、人はその「仁」を固有しているという說である。林兆恩の「心卽仁」說は、陽明學派の致良知說と比べて見ると、他者救濟の實踐を說く點で共通性が認められる。

(11) 李贄の墨子擁護については、拙稿「李贄『墨子批選』について」(北海道中國哲學會『中國哲學』第一六號、一九八七) を參照されたい。

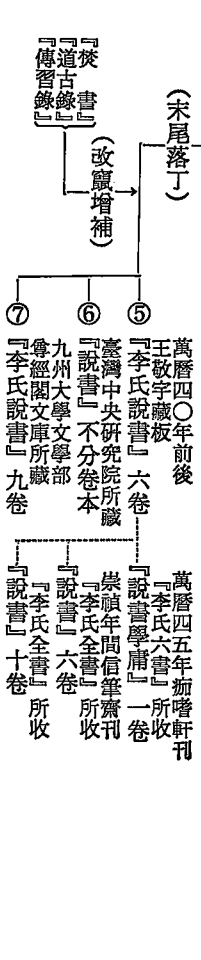
(12) 李贄の朱子學批判の詳細については、拙稿「明末の經世論と朱子學――萬曆中期における朱子學への批判と擁護――」(『朱子學的思惟』汲古書院、一九九〇) を參照されたい。

(13) JUDITH A. BERLING, *The Syncretic Religion of Lin Chao-en* (COLUMBIA UNIVERSITY PRESS 1980)、鄭志明『明代三一敎主研究』(臺灣、學生書局、一九八八)、林國平『林兆恩與三一敎』(福建人民出版社、一九九二) 等を參照されたい。

(14) 陽海清『中國叢書綜錄補正』(江蘇廣陵古籍刻印社、一九八四) に據ると、『說書』十卷 (「論語」三卷「大學」二卷「中庸」二卷「孟子」三卷) が『李氏全書』(半葉九行、行二〇字、白口、四周單邊) に收錄されており、『說書』六卷 (「論語統論」二卷「大學統論」一卷「中庸統論」一卷「孟子統論」二卷) が別の『李氏全書』(信筆齋刻本) に收錄されている。『李氏全書』の十卷本と六卷本は同じ內容らしい。また、崔文印「今傳本《李氏說書》眞僞考」(前揭) が指摘している六卷本の書誌的特徵は、分卷方式を除けば、全て九卷本と一致する。佐野公治『四書學史の研究』(創文社、一九八三) 第五章に據ると、日光の慈眼堂に六冊本が所藏されているというが、筆者は未だ見る機會を得ていない。陳

錦劍『李贄之文論』（前掲）に據ると、臺灣の中央研究院には不分卷本が所藏されており、標題に「卓吾先生李氏說書、王敬宇藏板、翻刻者必治」とあるという。この不分卷は九卷本と同じ構成である。不分卷本は六卷本と九卷本の中間に位置すると思われる。

『李氏說書』關係板本系統表



［附記］本稿の要旨は、平成六年十月九日に開催された日本中國學會第四十六回大會に於いて「僞作『李氏說書』考」と題して口頭發表濟である。